

論 文

文学作品にみる日中戦争下の“言語接触”

——戦場の中の言語と感情——

Linguistic Contacts through Literary Works During the Japanese-Chinese War(1937-1945):

Language and Feelings on the Battlefield

田中 寛

Hiroshi TANAKA

要 約

日中戦争という歴史に向き合うためには何が必要だろうか。歴史学者、社会学者といった研究者による検証、記述だけで歴史の総体は語られるものではなく、民衆の接触の事実こそが赤裸々な記憶として現在の民衆感情に継承されていく。それだけに文学、言語研究の角度からの検証、考察が重要な意味をもつ。要請されるのは、上からの全方位的な歴史視角ではなく、正面・前面を向く相対的、水平思考的な視界であろう。日中戦争という苛酷な現実の中で接触した民衆の心情の襲を、幾つかの戦争文学の作品を通して考察を試みる。

Key words : 日中戦争, 言語接触, 戦争文学, 感情史, 平和資源

1. はじめに——考察の目的と趣旨

日中戦争の多角的な検証は現代史の大きなメルクマール(指標)であり続ける。それは有史以来、日本が最初に体験した対外的な総力戦であり、日本人全体の戦争責任であると同時に、これが後のアジア太平洋戦争に連なる如何なる導火線を擁していたかを問う作業でもあるからだ。日中戦争勃発 81 年にあたって問うべき課題はいくつかあるが、前線で兵士が遭遇する人心の接触・衝突をできるだけ再現してみたいと思うのは、いつの時代でも末端の民衆こそが戦争の最大の被害者であるからにほかならない。そしてこの検証、記述の如何によっては、両国の相互信頼の構築にも多かれ少なかれ影響を及ぼしてくるからである。これまでもそうであったし、これからもそうあり続けることは疑いようがない。

文学は歴史学が考究、論究しきれない人間の感情場面をより鮮明に映し出す。それは歴史学が社会科学の一環としてより事実を客観視すべき母体であるのに対して、

文学はそこで掬い切れなかった心情、さまざまな人間模様を、独自の視点で描き出す手段を宿しているからである。戦争文学が書かれ、歴史学の「隙間」をうめる営為が絶やされないのも、そうした人間観察の「棲み分け」的な方法論的な叡智があるからにほかならない。戦争に対してなされたもろもろの反省の中で、文学は人間存在のあり方に照らしての、存在論的な反省を担った経緯を、便宜的な反省、政策的な反省とは別の次元で認識しなければならない¹。

兵士は四六時中、戦闘に従事するわけではない。戦場では果てしない行軍が大半で、立ち寄る民家で「調達」(略奪行為)を行うことも、路傍で無辜の民衆とすれ違い、物を与えることもあれば、休息の合間には風呂をたき、軍衣股等の洗濯をし、また銭湯や理髪、さらには慰安所を求めて東の間の生気を取り戻すこともあっただろう。侵略者と被侵略者という構図が一瞬溶かれ、反目し合う〈民族性〉から距離を置き、人間としての生々しい、一人対一人の対等な〈関係性〉をもつこともありえた。もう

一つの人間の裸の日常である。

周知のように戦時期には日本軍の移動の拡大とともに夥しい数の戦争文学、報道文学、手記が残された。それは負の遺産であると同時に、戦争から学び取る〈平和資源〉ともなるはずである。こうした戦場記録文学といってよい作品から、私たちは何をどう汲み取ればいいのか。今もあの時代に接触した日本語の記憶をやどす中国民衆のことを想うにつけ、また、現在も中国各地に存続する民間の日本語学校の歴史も辿るならば、戦争がもたらした接触がその端緒を拓いたという経緯も人々の記憶の中に残存するのではないか。戦史には書ききれない、末端の民衆の人心交流というものをどう位置付ければいいのか。著者はこの問いに答えるべく、従来の研究者に見られる「視野狭容(脱落)」の現場から、いくつかの問題提起を試みるものである。

なお、ここで言う言語接触とは言語学で用いる言語使用の場面を意味するだけでなく、人間対人間の固有の接触場面という意味で括弧を附している。

2. 短詩形文学にみる日中言語接触の情景

兵士は行く先々で歌を詠む。それは苛酷な日常のなかでほとんど唯一の創造の世界であったろう。だが、厳重な検閲がある以上、真実の吐露は保存がきかない。陣中手帖や従軍日誌などに書きつける。そして、無事に帰還してのち、戦争を回顧して詠んだものも少なくない。戦争の記憶は終生消えることはない。本節でとりあげる『昭和萬葉集』は、日本の高度成長下、昭和を回顧し記録する趣旨から編まれた。同書の紹介の中で、菅野匡夫(2011)は次のような社会学者鶴見和子のコメントをとりあげている(傍点、引用者。以下同様)。

歴史は人間世界をトータルに理解するために、社会史・経済史・思想史など、いろいろな分野別の研究が試みられてきました。しかし、いまだ感情史、人間の心の歴史というのは聞いたことがありません。(…略…) (引用者注「昭和萬葉集」のような感情史が加わることによって、はじめて人間をトータルに捉えることができます。

「感情史」の生成として、戦争文学に描かれた民衆の心情を取り上げる中で、短詩形文学はその尖鋭さにおいて際立っている。それはその時その場所での直面した感情の叫びを凝縮して「いま」「ここ」を離れることなく記憶という器に記録する力を有するからであろう。言語接触の

場面でいえば、たとえば、次のような短歌を拾い出すことができる²⁾。解説の便宜上、番号をそれぞれの首の末尾に附した。

道すじに水持ち待てる土民らが俄か作りの日章旗もつ⁽¹⁾ 石橋如水(1939)

無名村に破れし軍服を縫い呉れし支那の老婆の顔忘れ得ず⁽²⁾ 陣ノ内宜男(1939)

墨汁と筆たずさえて学校の抗日文字を塗りつぶす吾は⁽³⁾ 上岡芳市(1939)

日本語の反戦伝単生なまし柿赤き部落人影もなく⁽⁴⁾ 棚橋順一(1940)

残飯をとりにくる子らにひまあれば支那語を習い日本語を教ふ⁽⁵⁾ 吉本万次郎(支那事変従軍歌集)

(1)は占領地に日本軍を迎える民衆の光景である。俄か作りの日章旗をもつのは、軍関係者の指示命令なのか民衆の自主的な意図なのか分からないが、「土民」の生きていく上での極限の心情を曝け出す。(2)は行く先々での民衆との遭遇の一場面である。戦場の美化とも受け取られかねないが、兵士にとっては忘れがたき記憶だったのであろう。(3)も占領地に入った宣撫班が、新しいポスターを貼っていく宣撫工作を想起させる。(4)は国民党軍か八路軍かによって書かれた反戦伝単の生々しさを詠っている。本稿で後述する反戦同盟員が作成した投降、帰順を呼びかけるピラであろうか。(5)は村民との言語接触の場面である。ここでも対象は子どもであった。これらの短歌からは兵士や民衆の感情が浮かび上がってくる。戦争が長引けばさらに様々な接触場面が生まれる。引き続き『昭和萬葉集』巻五から民衆との言語接触にかかわる数首を引いてみよう。

日本軍はじめて入りし城内に逃げざる民もありて商ふ⁽⁶⁾ 秋田富士彦「橄欖」(1940.5)

軍隊区に居住許可せるいくつかの支那の床屋は兵に馴れたり⁽⁷⁾ 浅見幸三「アララギ」(1940.5)

うろおぼへの支那語使ひてゆるされし午後の外出を南京に遊ぶ⁽⁸⁾ 中山隆佑「アララギ」(1940.3)

太平の小学校に吾が見たる片仮名日本語発音表あはれ⁽⁹⁾ 下田武夫「アララギ」(1940.5)

(6)(7)は戦場においてもなお生きるがために商いをする民衆の姿を、(8)は覚えてたの中国語(おそらく「兵隊支那語」などを独学したのであろう)を使って東の間の休息

を楽しむのだが、この「遊ぶ」にもさまざまな情景が交錯する。(9)は、なかでももっとも戦場の無常観をさそう一首である。接收した小学校に設けられた日本語教室には、風にそよぐ五十音表が残されたのみである。戦場のこれら数首は確かに兵士にとっての初めての異言語異文化、異郷での接触場面をとらえて人間の生死を見つめている。俄か仕立ての言語侵略の悲哀である。だが、そこから喚起する感情を直線的に受け止めることはできない。

一方、かつて大陸俳句、戦場俳句と呼ばれるジャンルがあった。以下、数句をとりあげるにとどめるが、民衆はたとえ遠距離に位置し、眼前不在の状況ながらも、接触の点景が読み取れよう。

国原の水たてよこに彼岸鐘
彼岸婆々もろくはかなき涙しぬ
放牧の冬木に胡弓ひく童あり
うそぶきて思春のをとめ毛糸編む
(以上、飯田蛇笏「宿雪画」)

生還を期せず紅葉に背き行く(出征)
砲声に慣れて遊べり赤蜻蛉(行軍)
曼珠沙華、女郎花、血の一角に(激戦)
宵浅く早や鉄兜、秋の霜(露営)
風呂に入る違あれかし長き夜の(入場)

(以上、矢田挿雲「事変に関する句」)
なかんづく白菜きよし日の出待つ 小林廣芝
霾かぜに白く潤けり貌も魂も 寺田壽々
雪昏し民なき屯にけふも泊つ 山口蒼兵
(以上、句集『成紀』より)

『成紀』(1943)は北京在住の石原沙人主宰の合同句集。俳句もまた、中国大陸詠と称して新境地をもとめたが、そこにも異国の大地に生きる民の暮らしに不自と視線が集まった。詩集にもいくつか言語接触の場面を取り出すことができるが、ここでは中野繁雄(1915-1957)による『戦線民謡集 今日もまだ生きています』(積善館 1941)に収録された「日本語(リーベンホア)」「語」はママ」という詩をみてみよう。

昨日教えたアイウエオ、
今日は書いてるカキクケコ
明日教えるサシスセ……を
今日教えてと小孩子に、
兵隊先生ねだられる

「小孩」または「小孩子」は兵隊の間で「苦力」とともに頻出する語彙である。戦争の無惨さ、悲惨さから眼をそむけるようにして、兵士たちは幼少年少女を愛撫し癒したのであった。中野繁雄は早稲田大学中退後、満洲、中支、ノモンハンを転戦、太平洋戦争期には詩人として出発、『詩集みたみわれ』(積善館 1942)、『馬と征く』(戦線詩謡 1941)などを刊行し、戦後は芥川賞の候補にもなった。この詩にはのどかな兵士と子供たちの「交流の輪」が描かれているように見えるが、作者のその奥にある心情は伝わってこない。逆に真実を隠蔽したかのような光景が気怠く立ちのぼるだけである。

それにしても、日本軍が急ぎょ作成した初級教科書をどのようにして教えていたのだろうか。多くが農民上りの末端の日本兵士は「東亜の新秩序」という高邁な理想をどう思い描いていたのだろうか。実作者は遭遇した点景を叙述化するうえで、相応の「脚色」を用いることは避けられない。それが単純な「美化」なのか、心情の率直な吐露なのかは当人にしかわからない。

3. 木原孝一「戦争の中の建設」にみる中国の民衆像

詩人木原孝一(1922-1979)は若き日に建築を学び、日中戦争初期には中支派遣軍として出征した。敗戦末期には硫黄島でも陣地構築のため派遣される。自伝譜とも読める「世界非生界」に沿って従軍までと従軍以後の足跡を追ってみよう³。盧溝橋事件勃発直後、木原は陸軍省に呼ばれ、陸軍の委託学生に任ぜられる。大学まで進めないことがわかり、卒業と同時に陸軍の技師となって戦場へ行くことを悟る。戦地で最も不足しているのは建築技師である。「突貫教育」によって昭和13年暮には卒業、近衛師団司令部付で野戦建築の講習を受ける。翌年4月、中支派遣軍司令部転属被命、病院船で上海埠頭に上陸後、海防艦に乗り換えて揚子江を遡上、南京下関埠頭に到着し中支那派遣山田部隊軍司令部に着任した。「最初に与えられた仕事は平木部隊自動車廠新設工事。玄武門の城外に土地を買収する仕事から始めねばならなかった」ことに戸惑いながら民衆との接触を余儀なくされる。簡単に土地の買収というが、強制的な「没収」である。前線には立たないが、兵舎や塹壕、陣地を構築する作業が連日続いた。急造バラック兵舎で毎晩のように徹夜で設計を急いだ。城外の鎮に陣地構築工事に向う途中、輸送トラックは屢々ゲリラの襲撃に遭遇し、生死の境を体験することもあった。自らの〈技術戦士〉としての中支従軍体験を18歳のときにまとめた手記『戦争の中の建設』(第一書房、1941)には「僕」の瑞々しい心の動揺が描かれて

いる。場所は南京郊外であろう。某農村聚落広場には三十人程の農夫が集まっている。ちなみに乗りつけたトラックは改良を重ねた日本の誇る国産のニッサンのトラックで、「大捷」の日章旗を翻らせている。

通訳が「先生。全部集まりました。」と聞かや、「僕」は民衆に向って通告する。

「此の土地には今度新しく日本軍の建物が設けられる。それで此の中に住んでいる者は全部二十五日の正午迄に此の土地を離れなければならない。その時に建物の窓及び出入りの建具其の他建物に附いているものを持ち出す事はできない。(略) 移転に要する費用其の他の金銭は特別市政府特務機関において支払う筈である。分ったか。」

僕の言葉が終わって通訳が支那語で喋り始めると彼等は口々に「アイヤ」と叫んだ。それは次第に多くなって何やら訳の分からない騒音になった。僕は「各自。二十五日に移転の手配をするように。」と叫ぶような大声で言った。

勝者と敗者の具体的な決着は、常に民衆の悲哀、悲嘆となってあらわれる。こうした場面は、日本軍が侵攻する村々で行われた日常的光景であったろう。家屋や田畑を残して離れなければならない屈辱は、こうした場面からも伝わってくる。村民の口々に発した「アイヤ」(哎呀)という叫びは、驚愕、落胆、困惑のすべてを取りこんでいる。

日中開戦後の翌年 1938 年 3 月には南京に中華民国維新政府が樹立され、4 月にはその管轄下に「督辦南京市政公署」がおかれ、翌年 3 月には「南京特別市政府」と改称した。上掲文中に在る特別市政府特務機関とは、日本軍が設けた特殊軍事組織のことで、情報の収集(防諜)、宣撫活動、対反乱作戦など多岐にわたった。宣撫班員、憲兵下士官と、一個文体の護衛兵を率いて出かけて先では農民に高粱酒を飲まされて前後不覚になることもあったし、束の間の休息時には慰安所に通い続けたこともあった。上記一節からは中国人の農民や日本軍が雇用する中国人通訳、苦力に対する措置などにも同機関が関わっていたことが了解される。ただ、この通訳がどのような人物かは解説されていない。「先生」というのは、中国人の使う呼称である。中国人通訳である事はほぼ間違いない。それにしても 18 歳の青年がこうした命令を垂れること自体、民衆にとって屈辱以外の何物でもなかっただろう。木原孝一の実際の従軍体験でもあるこの作品

には語られていないが、のちに〈技術戦士〉である「僕」は建物の一部として応急に日本語学校なども手掛けたかもしれない。「僕」は、次のような情景にも胸を衝かれることがあった。咄嗟に自覚された戸惑いと羞恥心の中に混在する、正体不明の恐怖心である。

その先には玉蜀黍の畑が続いていた。僕は頬に葉先が当たるのを感じながら歩いて行った。畑を出るとキャベツや大根の畑であった。一面の緑色の中で四五人の姑娘が野菜を摘んでいた。ふと僕は立止って青い支那服の彼女達を眺めていた。すると彼女達の中の誰かが僕に気付いたらしい。皆が一せいに僕の方を振り向くと突然摘んだ野菜を抱えて走り出した。僕は苦笑しながら一番近くにある民家に向かって歩きだした。

物言わぬ接触は、驚愕と嫌悪の感情であったが、「僕」は苦笑するほかない。両者の懸隔は「建設」を至上命令とする「僕」には遠い憧憬、高い理想であった。民衆の意識がまるで淡い蜃気楼のように立ち込めているだけである。「僕」は民衆の姿を見て立ち尽くす。それにしても、この「僕」の「苦笑」は意味を汲み取りがたい。単なる「照れ笑い」でもなく、年頃に見る羞恥でもない。速成の勝者への奢りに対する自己韜晦、懺悔ともいえようか。

彼等は今日の食糧さえあれば働こうとしないのだ。晴れた日でも午睡かマアヂャンをして一日を終る。そして食糧さえあれば五日でも六日でのそうした日々を続けているのだ。(中略) 彼等を働かせるものは食糧の不足だけだ。彼等に文化を与え生活を与えるのは一体如何なものなのか。彼等は何によって動くのだろうか。彼等の生活を建設するものは何なのだろうか。それはすべて不可解のまま薄暗い煉瓦の室の中に沈んでいる。僕はふと僕等の建設戦の前途を思った。(同)

若きインテリの抱く葛藤—「彼等の生活を開く鍵はどこにあるのか」。東亜新秩序という建設は遠大な、夜郎自大な構想に過ぎない現実を悟るのだ。若い頃から胸を病んでいた木原はその後も吐き出して、内地に還送されるのだが、二ヶ年の戦場体験を脆弱な胸に刻んだ彼は、戦地に顔づく心情をいくつかの詩片に残した。

眠れないままに僕はアンペラの扉を開いてクリ

イクの岸に出た。月はもう荒れた城壁のうえになかば傾いていた。僕はふと支那犬の遠吠えを耳にしながらかこの数箇月にわたる激烈な生活をおもい浮かべた。それは昨日もそして明日もない砂漠の生活に似ていた。そのなかで僕のさまざまな仮面は音もなく剥ぎとられていった。と同時にそれは僕の人間を復活させていた。しかし何時か僕の翼は。貴重な翼を折れていたのだった。僕は微かな胸の痛みを気にしながらふと夜の空を見た。すると楡の木の上のあたりにたったひとつあかあかと燃えている星を見出した。僕はその星のなかに幻燈のように映る僕の幼年や青春を身動きもせずに見つめていた。そのかすかな星の光の中に僕はなぜか比類なき不運の暗示と幸運の暗示さえも見出していた。夜明けに近い空を羊のような雲が紫色に流れ去った。(「仮面」 pp.70-71)

作者はこうして内面に抗う自身と並走しながら戦地を体験したが、それは現地での名も知れぬ民衆との接触がなければ刻まれなかった記憶である。「無名戦士」のなかの一節「男の声」から、その叫びが木霊する。

葡萄のにおい／生まれた土地のにおい／其処でおれは幻を見たことがある／稲妻にうたれた一匹の羊 その眼の中におれがいるのを／墜ちてくる一羽の鳥 その翼の中におれがいるのを／熟れた葡萄は土に落ちる／蜂は乾草のなかに死ぬ／鳥は空に 魚は水に／農夫は盲いた石の下に／だが おれの眠りの石は此処にはない (p.24 「/」は改行、以下同様)

作者は他者との遭遇によって、惰眠を貪っていた自者とも向かい合うもう一人の自分を知る。それこそが真の人と人の接触であることを悟る。その時、その場所で得られなかった自省、内省を突き詰めていくとき、身体の中にもう一つの言語接触のなかでの後悔と良心との相克が展開する。過去への遡行は未来への旅立ちだが、遭遇した民衆の孤影は終生消えることはなかった⁵⁾。

4. 民衆の生活空間に「浸潤」する日本語

前節で述べたように、戦場は破壊のあとに「建設」という、いわば治安の後始末が控えていた。日中戦争の勃発後、占領下におかれた地域では軍によるさまざまな宣撫工作(活動)が展開し、民衆との直接接触が生じた。

俄か仕立ての日本語学校が作られ、兵士が俄か教師となって日本語や唱歌を教えた。国旗掲揚、君が代斉唱、宮城遥拝といった精神教育も強いた。また、多数の日本の民間人が中国大陸に渡り、軍の関与とはまたちがった形態で日本語が浸透していった。こうして、軍部の宣撫活動と民間の日本語普及という二本立てで多様な形態が生まれていったが、その一方で、たとえば満洲国建国大学や北京近代科学図書館といった高等教育機関で、高級(上級)日本語、日本語教習が実験的に行われたところもある。これは三種の表記体系をもつ日本語という言語的性格という背景に依拠していたかもしれない。難解なもの教え込むのが日本精神の注入にもつらなるという、日本語が本来持つところの自己矛盾でもあった。そして「建設」の全体に通底していたのは「宣撫」という思想、観念であった。「宣撫」(宣撫班、宣撫官)とは、

戦争及び事変の場合、占領地の人民に対し、その戦争及び事変の意義、占領国のこれからの意図などを宣伝し、私的にこれを撫育する仕事に携わる団体を宣撫班というので、これは支那事変に於いて初めて使われた名称であり、その前にこの名称の使われた例はない。(傍点、引用者。以下、同様)

(『興亜ノート 新東亜の時事問題早わかり』新東亜研究会 p.16)

のように、「支那事変」後の使用形態を強調しているが、日本文化、日本語の普及をもって同化せしめようとする政策的意図があった。

さて、事変後から日中戦争におけるこうした日本語教育の多様な姿態(異態)の浸透を検証することは多くの一次資料を見ていくと同時に、空白を埋める作業が不可欠となる。当時の雑誌に発表された戦場小説、報道記事、手記などにも垣間その実態を見ることが出来る。戦地で芥川賞を受賞した火野葦平は『麦と兵隊』には次のような一節がある。

報道部に帰って来ると、木村部長や佐伯少佐が自動車で出かけるところで、梅本君を探しているから聞くと、難民大会へ行くのだという。又、東菜市场へ行く。すぐに始まった。日本語のわかるのが三人程居て、通訳をしていたが、その流暢なのに一驚した。南京あたりから連れてきたものらしい。

(中公文庫 2000, p.144)

日本語のわかる通訳とは中国人で恐らく日本留学体験者であろうか。どのような内容の通訳をしたのか。南京からどのような経緯で連れてきたのか。南京には日本語通訳を養成する機関、組織があったのか。民衆は何を感じ取ったのか。難民大会、東菜市場ではどのような言語が飛び交っていたのか——等々、小説の一場面からも、こうした疑問、興味が持たれるのだが、文学には歴史書にはない日常臭さ、人間臭さがただよっている。

また、慰問団の訪問による「交流」が目論まれたことも想起される。慰問団も日本内地からの派遣もあれば、現地で現地職人を雇用して組織したのもあった。次も小説に描かれた場面である⁶。「香港陥落の祝賀も兼ねて」とあることから、1942年春、場所は広州方面であろう。

水島たちの隊にも、慰問団がおとずれてきた。僻遠の小さな分屯隊では、まことに思いがけないことであつた。その近くの、水のない大河は、その砂床が、殊にその頃、匪団の通路になっていた。水島たちもしきりに出動し、銃砲声も、しばしばおこつた。けれども、その二三日、匪情はおだやかだつた。正月も間近だつた。もう餅搗がすみ、その餅もいちはやく口にして、正月用の酒保品なども分配され、皆、もう、二日のちの正月を、なんとなく迎えたような気になっていた。それに、香港陥落の祝賀も兼ねていた。慶祝のポスターが、家々の壁や、路傍の柱に、たくさん貼られていた。英国、美国（アメリカ）、香港も知らず、文字さえあまり読めないのが、一般部落民の実情だつたけれども、できるだけ賑やかな気分を出したいのが、日本側の意図であつた。／貧弱な支那人のサーカス団だつたけれども、楽隊を持っていた。そして、三つ四つの喇叭と、太鼓とが、前景気のコンサートをひらいていた。日本の流行歌などで、それも、たどたどしく、でたらめな節調だつた。それでも、水島は、急に胸がおどつて、歓喜にはしゃぎながら、班内から門前へと駆けていった。もう祝祭の雰囲気、満ちていた。（連載短篇、池澤茂「慰問団」『コギト』116号 昭和17年3月）

回想記のようにしてまとめられた手記にも言語接触の場面が登場する。昭和18年春、福建省の厦門に近い部落で教会風の建物を改装して日本語学校を開設した歩兵連隊は避難民の日本語の巧みな少年とともに日本語の授業を始めることとなつたが、ある日、香港から「妙齡の姑娘」が到着して以来、活気を増していった様子が描かれ

ている。

……日本語学校の生徒は、日を追つてその数が増えていった。男女合わせて、約五六十名はいただろうか。ある時は、もう真夏を思わせる積乱雲を望む窓辺で、「ハナ」「ハト」「マメ」を斉読し、ある時は、鬱蒼たるライチイの木陰で、「夕焼け小焼け」を合唱した。……略……私は、人間と人間との間の、言葉の相違という目に見えぬ壁が、こんなにも大きく隔てていたのかと、今更のように驚いた。そして彼らと親しくなればなるほど、東洋の平和という美名の下に、一方では熱心に日支提携を説きながら、今一方では同じその相手と日夜戦争殺戮を繰返している矛盾した現実に苦しまないではおられなかつた。（週刊朝日編『父の戦記』朱村日本語学校、八木朝治から）

「妙齡の姑娘」を前線に立たすことは宣撫活動の有効な便法で、子どもや婦女子を対象にしていかに日本軍が手堅く、平和裏に民衆の中へと潜入していくかという懐柔的な智慧であつた。戦争という苛酷な悲劇はもとはといえば「人間と人間との間の、言葉の相違という目に見えぬ壁」から生まれたものであり、一方では戦場を控えての矛盾した実情に、後ろめたさ、負い目を感じている心情が明かされている。宣撫官の実態を描いた小説にも、感傷的な、ときには抒情的な場面に遭遇することも少なくない。広大な中国大陸では戦場はまさに点と点をむすぶ戦闘でしかなく、こうした〈点景〉も日常的に横溢したであろう。戦場とはいえ、未曾有の接触場面に遭遇した相互の驚きは今日からすればまったく未知との体験であり、方言話者も東京方言話者も隔てなく中国人と日本語と支那語でやり取りするほかなかつた。様々な接触場面で様々な異態、擬態が生じたのは避けられなかつた⁶。

5. 「事実小説」にみる兵士と現地民衆との言語接触・日本語工作

戦争文学の量産されるなかで、民衆（屢々土民と称した）との接触は、宣撫官のとくに記憶にとどめた情景であつたが、ここではその一端を紹介する。多くがセンチメンタルな、ノスタルジアの色調に彩られているが、中には当時の状況を具体的に伝えているものもある⁶。ここで取り上げる「事実小説」は、ドキュメンタリー的な手法で書かれている報道文学の類である。中野太郎『宣撫官』（1939年）には次のような接触場面がある。

すでに八時は廻っていたので、啓舟は婦人授産処へ、栄花と胡清は、日本語と唱歌を教えに、すぐ屯所から出て行った。(同書 p.11)

僕はそっと額にハンカチを当てがった。やがて、栄花はぼくの傍へ来て「お稽古しましょうか」と、生々とした眸を投げた。この眸に、本当に悩みが潜んでいるのだろうかと思われた。勉強する気にはなれなかったが、栄花の好意を無にしてまで、日課としている支那語の発音は断り得ない。(同書 p.15) …

僕を見て、級長が少年達に、起立、礼を号令した。ここへは、十幾度か来るが、少年達も熱心だが、あたかも経験者のような栄花の教授ぶりには、まったく感心した。幾つかの、片仮名の単語が書いてあって、その説明をしていた。(同書 p.22)

捕虜となった中国人女性、栄花が「あたかも経験者のような教授振り」で、次第に日本人に同化していく様が描かれているが、表面的な過剰な素描にとどまっている。他者は隷属的で刹那的な感情の存在でしかなく、恣意的な感情の吐露だけにとどまっている。

小島利八郎『宣撫官』(1942)の一章に「日語学校」があり、小学校の復興と同時に日語学校の開校式から日々の日語教授の実態が書かれているので抜粋する。

…それから毎日私の日語教授が始まった。午後一時から三時迄毎日二時間、一時間は日語、一時間は唱歌という時間割でやっていった。もう施療の方は呂宣撫官に一任して、私は学校に全力を注ぎ込んだ。／日語は始めから五十音を「教えて、日本語はむづかしい嫌なものだという感じを与えないように、まず身体各部分の名称を、自分の眼や鼻や口を押さえて、メ・ハナ・クチ・ミミと一々教えてやった。小孩達は皆非常に面白がって、メ・ハナ・クチ・ミミと一々自分の顔を手で押さえて言っては笑う。それから「今日ハ」「サヨナラ」「オヤスミナサイ」「ゴク로우サマ」と日常慣用語に入っていた。／彼等は忽ち覚えてしまって、歩哨の前を通る時等は「ゴク로우サマ」と片言交りに言っては通って行く。町には片言交りの日本語が叛乱するようになった。日語は、私の教えた後を、一緒に習って居る孫条新が後にまたくりかえして教えて居るような熱心さだったので、皆僅かな間に上達してしまった。日語に対する興味がずっと高まって来たので、もう五十

音を教えてもよからうと、それから私はアイウエオと一つ一つ字に書いて表すことを教えていった。

(『宣撫官』, 1942 錦城出版社 pp.114-116)

ここでは具体的な日本語の授業光景が再現されている。「日語教授」の基本として直接法による導入が奨励され、身体用語の復唱、そして簡単な挨拶言葉にうつる。もうひとつは、日本の歌唱指導である。以下では、日常化した情景が高揚した気分で語られている。

唱歌は日語の終った次の一時間に教えた。天氣の良い日は、広場にオルガンを持ち出して、「春が来た」や「白地に赤く」や「もみじ」等の歌を教えた。それらが一通り歌えるようになると、私は愈々「君が代」を教え始めた。初め「チミガヨハ」と訛って歌いだすのを根気よく訂正して、全員揃って正しく教えるようになった時である。私はいつものようにオルガンを持ち出させ、オルガンの廻りにぐるりと輪を作らせて、「君が代」を弾き始めた。そして弾き乍ら、歌っている小孩の顔を一人一人見渡した。大きな口を開けて、懸命に歌っている。私は可愛くて仕方がなかった。／ふと眼を上げて空を見ると、校庭に立てた日章旗がはたはたと翻って居る。日の丸が蒼い空に鮮やかに映えて居る。瞬間、私は何か言い知れぬ感激を身を感じた。祖国を遠く離れて今この大陸の一隅に、御稜威に輝く日章旗を仰ぎながら、「君が代」を歌って居る私、しかも幼い支那の子供達迄と一緒に歌って居るのだ。——何かしら眼頭が熱くなってきた。そして、自分が現在やっている仕事の尊さが、青空に映える日の丸のようにはっきりと解った。(後略) (同 pp.114-116)

「姑娘」もまた「小孩」「苦力」と同様にその描写は自己存在をひきたてる描写の道具となっている。

次は前掲池澤茂の連作短篇から。北支に従軍した水島の体験を綴った「郷村小学校」では実際の日本語の接触があったのかどうかは不明だが、民衆との遭遇が印象的に描かれている。

水島は、しばらく躊躇していた。それから、おもいきって、観音開の戸をひきあげ、ずいと内へはいった。／おびえて、うすぐらいなかで椅子にこしかけている多くの子供達が、そのまま硬直した姿勢で、水島をひたと見つめた。巢のなかで寄りあってこ

もっている小鳥の仔たちのようであつた。あけがたほどの晦冥にひそみながら、意外に多くの小孩が、ぎつしり詰まっているようであつた。／『你来了(ニイライラ)。你来了。』一回目は低く、二回目は高く張りあげながら、奥の方から、油気のない長髪を頬から首筋のあたりまで垂らした若い男が、あおじろい顔を、すつと浮かび上がらせて来た。そして、水島とまっすぐに向かいあうと、ふたたび『你来了』と、くりかえして言った。木彫の面のように押ししずめた面持であつた。警戒心と恐怖心が、あきらかに敵意をさえ含みながら、その面上に、つめたく燃えていた。水島は、つと、心を打たれた。その男の真意に触れたような感動だつた。／そのころ、水島は、建設への誠情をかたく抱いていた。一般支那民衆への施療という、衛生兵としての、あらゆる宣撫的任務の場合だけではなかつた。特に、戦闘が治安と並行しておこなわれなければならない北支において、とりわけ自然に、水島の性情は、建設面への趣向を帯びていた。水島の一挙一動がそうだつた。支那人への答礼、応接など、ときに戦友にかかわれるほど、かれの態度は小心であつた。けれども、当然、多くの支那人たちの、阿諛的な慰撫や、恐怖から発する盲目的な従順よりも、そのまま真直ぐに露出して来る真情が好ましかつた。というより、信用が持てた。こういう男なら、本当の理解や恩恵を感じてくれたときには、やがて又、真情をもって報いてくるにちがひなかつた。そして、建設の小さな種は、こういう男の畑にまかれてこそ、着実な育成が期待できるのではなからうか。(後略)

衛生兵である水島は立ち寄った村落に眼病を患う老人の診療にあたる。その件心的な、個人的な行為は軍隊という苛酷な規律を瞬時でも離れ、民衆と向かい合うことで、戦争に対するある種の贖罪を得ようとしたのであろう。「郷村小学校」にはやがて、「水島先生に会いたいです」と何度も訪れる生徒があとをたたなかつた。池澤茂の作品には短篇ながら、民衆との接触場面を忠実に描いており、「慰問団」「柿の実」などの逸品が日本浪漫派の作品を多く掲載した『コギト』に連載されている。

山本和夫『青衣の姑娘』(1940)は湖南省洞庭湖湖畔を舞台に、駐屯する第一線部隊の日常を「平和を連呼し続けた宣撫部員の体験による心理的報告である。日本語を通した宣撫官の日常をいくつか紹介する。

ポスターやピラを、彼等は貼りながら進んで行ったが、ある一軒の家で、おやつと、立ちどまった。彼等はここで日本語で書いたガリ版のポスターを発見したのである。それには、「この民家内に立ち入るを禁ず 大日本憲兵隊」とあり、しかも大きな憲兵隊の印が押ししてある。この地区には憲兵隊はいない。また、この字は明らかに支那人の手つきである。平仮名雑じりではあるが、手つきは明らかに支那流で、日本人には、こういう字は書けない筈である。してみると、明らかに贋造である。(p.104)

ある村を皇軍が占領するとその村かの住民から選出された村長(最高委員)が出て、新しい村(自治委員会)が宣撫委員の肝煎で出来上がる。そしてその村の家々に、日の丸の旗と五色旗がヒラヒラト小鳩のように翻るのであるが、村の良民には、宣撫委員の大きな印を押しした良民証であるあるという証明書が与えられる。この証明書は、皇軍と共に協力して新しい支那を、そして新しい東洋を築きあげようと約束したもので、職業は何、年は幾つ、何々村に住むという簡単な履歴が証してある。(pp.235-236)

北少尉が、浴室から出て来ると、向こうにやさしい歌が聞える。彼は思わず立ちどまった。彼の頬に、やさしい光がはしつた。——／ぼつぼつぼ 鳩ぼつぼ／子供の歌声が、村はずれの田圃の方から聞えて来た。リズムがどこかちがう。だが呆然していると、内地の子供が歌っているようだ。こちらには兵隊以外に、内地のものは一人だっていないのである。それを知っていながらはつとする。日本の子供がやって来たのではないかと。(中略)／このK村に小学校をつくらうと、宣撫委員たちは計画しているのだが、机と椅子がそろわないので、まだその運びにいたらない。／ぼつぼつぼ 鳩ぼつぼ／声は合唱になった。支那の子供たちのうたう歌は、K村の宣撫委員が教えたのではない。栗原軍曹の調べたところによると、岳州の小学校に通っていた子供がこちらに帰って来て、村の子供に教えて居るのであるという。／「こちらにも、早く小学校をつくらなくっちゃ」と彼は思う。(略)／この村に、支那の子供の歌をみなぎらすのも、そう遠いことではない。早く小学校をつくれれば……と思う。学校をつくらなくても、あんなに、うれしそうに朗らかに、日本の歌が入りこんだではないか。／「それにしても——」と

彼はつぶやくのであった。「あの美しい葉姑娘が、子供たちの中に雑じって、そうだ、子供たちの頭をなでながら日本の歌をやさしく歌うようにならなければ、この村に、本当の平和が来たとはいえないかもしれない。早く、そうした平和を手繰り寄せなくちゃ——」…略… (pp.200-203)

従順のなかにも民衆の抵抗がうかがわれる。こうした宣撫官の記憶・記録には一方通行的な言語接触の高揚のみが語られ、主観的な位置にとどまっている⁷。

以上、やや冗長さの残る文章までも敢えて掲げたのは、戦場という時空間が人間の極限の思考や思索を強いるのみならず、思いがけない感情のとば口をも示しているからにほかならない。

6. 日本人反戦同盟員の活動——高橋和巳「邪宗門」の〈挿話〉から

高橋和巳(1931-1971)の長篇小説「邪宗門」(1967)の後巻、第二部第十一章「捕虜」冒頭に日中戦争当時の日本軍兵士と中国軍兵士との「言語接触」が描かれている。周知のように高橋和巳は39歳で夭折するまでに長篇を幾つも書き、なかでもこの作品はスケールの大きさにおいて世界文学にも匹敵すると評される⁸。作者がどういう経緯でこうした着想を得たのか定かではないが、興味をそそられる場面である。ことの概要は次のようである。

第十×師団中隊の伍長だった陸軍軍曹貝原洋一は昭和14年以來の蒋介石軍の総反攻に対する反撃作戦に従軍し、行方不明になる。その後、本隊に帰還中に敵に包囲され、国民党正規軍の捕虜になってしまう。重慶近郊に設営された捕虜収容所には百余人の日本兵捕虜が居た。ある日、眼鏡をかけた瘦身の日本人と、巧みに日本語をあやつる若い支那女子軍の将校がおとずれる。彼らは捕虜たちの「教育」をはじめるとあたり、こう宣告する。

「君たちは欺かれています。この戦争は聖戦でも何でもなく、日本国民全体の意志でなされているわけでもない。天皇を頂点とする少数の支配者や軍閥、独占資本家やそれと結託する官僚どもが民衆の反抗心を外にそらせ、自分たちの利益を守るためにやっていることにすぎないのだ。日本人民は中国人民と同様に苦しめられ搾取されており、君たちが撃つ一発の弾丸は、内地で搾取されている君たちの父母の何滴かの血から成っている。(中略)力を尽して戦ったのちに捕虜となったことを恥じる必要はな

い。……それは、真の敵はなんであるかを見定め、人民の膏血をしぼって自分達だけが肥え太っている真の敵と闘うことだ」(新潮文庫『邪宗門』p.9)

日本人に同行してきた中国女性は貝原洋一に目を掛け、中国語を教えることを名のりである。「ともかく中国の言葉を勉強して、中国の文化、中国の民衆の喜怒哀楽にじかに触れなさい」という。そして、民衆の置かれた境遇を切々と告げるのだった。

「あなたがたも見て来たでしょう。一つの村を占領すれば、その城壁には日本軍万歳と貼り紙があります。しかしその貼り紙の裏には、日本帝国主義打倒の文句が書かれています。共産軍が進駐すれば共産軍の、国民党軍が立ち寄れば国民党軍の、そして日本軍が入って来れば日本軍向きの歓迎の言葉を並べる民衆の悲しみが、あなたがたも人民なら解るはずです。(中国語)(以下省略)」(同 p.10)

こうして貝原洋一は「心をゆさぶられ」、北京官話を習うことになる。反戦の宣伝工作員としての訓練である。やがて、貝原洋一は反戦同盟員として任務に就き、宜昌近くで日本の上海派遣軍に接近する。谷間に休憩する先遣隊に向って、備え付けたマイクに担いできた蓄音機の音楽を流すのだ。その歌とは「父よあなたは強かった」の替え歌である。

父よ、あなたは馬鹿だった 兜も溶かす炎熱に
敵の屍とともに寝て、泥水呑んで草を噛み
顎を出しつつ幾千里、よくこそ歩いて下さった

大阪朝日新聞、東京朝日新聞が1938年10月に「皇軍将士に感謝の歌」の懸賞募集をしたのに対し、一般女性の福田節作詞、明本京静作曲の「父よあなたは強かった」が選ばれ、翌1939年1月にコロンビアレコードから発売された。戦時歌謡として流行したが、貝原洋一はこの軍歌の替え歌に反対する。「こういう替え歌は、日本の兵士が酒保や慰安所で歌うのならいい。だが、こんな歌が敵側から聞えてきたらどんな気がすると思います？人間は自尊心をもつ動物です」と述べたのに対して、同行の女性兵士李桂芝は貝原洋一に任せることにした。ふざけた替え歌の文句では人心の深奥には迫らない。貝原は、日本人の愛唱歌「荒城の月」のレコードを流す。すると、一帯は深い静寂につつまれる。

貝原洋一は震える手でマイクをとり、拡声器のスイッチを入れる。

「親愛なる日本軍兵士諸君、なつかしい我が同胞よ。こちらは日支の人民の協力によってなる反戦同盟であります。自分はその反戦同盟に所属する日本人南原洋三であります。…(略)…この戦争、この「殺戮、この流血は無意味です。……遠く家を離れ、家族と別れ、それぞれの生業を捨て、父母や妻子が病んでも見舞うことすらできぬ苦痛を忍んで、いったい南のために戦うのでしょうか。日支の間には、日支の人民の間には、たがいに憎み合わねばならぬ何の理由もありません。…(略)」(同 p.14)

戦争体験といえば、中学生で敗戦を迎えた高橋和巳には中国大陸での戦場体験は勿論ない。こうした情景の断片については、高橋は中国文学の研究をすすめるかたわら、多くの著作から学んだと思われるが、師とあおいだ吉川幸次郎をはじめ、京都学派の先輩諸氏からも多くの体験談を吸収していたのであろう。反戦同盟員による放送は長く続いた。

「……心優しい日本の兵士たちよ。あなたがたは行軍の途次、路傍に伏せる罪もない農夫の屍を見て、畑を見て、心に痛みを感じませんか。風土や言葉こそ違え、人間の悲しみは共通です。両親を失って悲しむ子を見て涙をもよおす気持ちがあるなら、それを我が身のこととして、もう一度なぜこんなことをせねばならぬのかと考えてみてください。……(略)」(同 p.14)

日本軍の兵士の大部分は農民である。農民こそは大衆、人民の苦しみがわかるはずだ、と訴える。最後には、ここは危険地帯だから進軍を回避せよ、と通告する。こうした作品に挿入されたプロットは、戦場においても敵味方を問わず心を通わせる行為が交されていた事実があり、戦場の末端兵士の実際、心理状況が歴史学の記述とは異なる視点で迫ってくることに気づかされる⁹。

日本敗戦後、現地で戦犯となった日本軍兵士はのちに撫順や太原の戦犯管理所で中国側の教習を受けることになる。かつての「清郷」工作にすべてを捧げた兵士、宣撫官も、勝者による寛大な処遇に戦争犯罪の反省を迫られ、懺悔する。敵側への「帰順」は想像を絶する葛藤があったにちがいない。そして占領地の人々の「創傷」を

慰撫したはずの日中親善の擬制はやがて現実のものとなってたち頭われることになる。

7. おわりに—記憶と歴史記述の真実のはざままで

一口に「言語接触」といってもさまざまな人(侵略者)と人(現地住民)との接触場面があった。そして、それは予期しない悲劇の顛末へと突き進むこともあった。

井戸は部落内の十字路のところにあった。山岳地帯だから井戸はかなり深く、綱をつけて遠い水底から汲みあげるのだが、これは意外に技術を要し、馴れないとなかなかうまくいかないものである。部隊が守備について二、三日に、炊事係の山村と木岡が、井戸端で水汲みに苦心していると、兵隊たちのぐりに集まってきていた部落民の中の一人の老農夫が、みかねたように手伝ってくれた。彼は、まことに器用に水を汲みあげてくれたものである。/「どうだ。タバコでもやるか」と二人は相談し、一人が「ほまれ」を礼として一本やった。老農夫は大喜びで「先生謝々」^{シーセンシェンシェ}をくり返し、明日も手伝わしてもらいたい、といったものである。(伊藤桂一「麥萌える」)

作家伊藤桂一(1917-2016)は従軍体験を戦記小説の形で数多く残した。某占領区での出来事。水汲み隊と部落民は次第に馴染みになり、部落民は水汲み苦力として日本軍に協力し、守備隊も何ら危険を感じることはなかったが、ある日、二名の苦力は橋を渡り終えると水桶を下ろすや、いきなりモーゼル銃をもって歩哨を撃ち、もう一人も衛兵所にとびこんで控兵を次々に射撃した。ついで駆け込んできた中共兵の奇襲戦法により、青竜河鎮守備隊は全滅した。彼らはいつのもにか便衣兵に変貌していたのである(『悲しき戦記』)。

また、憲兵に囚われた捕虜たちも、苛酷な尋問のあげく悲惨な死を余儀なくされたことも数多い、歴史に埋もれた記憶=記録であった。とりわけ、731部隊の特殊移送にかかわる重大案件については今も忌まわしき記憶として刻まれている。

日中戦争を見直す近年の研究では、笠原十九司(2017)や五味淵典嗣(2018)などが刊行されている¹⁰。歴史関係の雑誌ではいくつかの特集も組まれた。一方、中国では国家プロジェクトとして大々的な歴史検証が歴史学者の総力を挙げて取り組まれ、最近では「抗戦八年」の実態を克明に検証すべく46巻にもおよぶ大部の《日本侵華決策史料叢編》(北京・社会科学文献出版社2018)が

刊行された。日本による中国侵略の政策決定文書や経緯を解明する歴史研究は、その規模といい分野といい、日本とは格段の違いを見せている。だが、それらの研究の規模にしる記述内容にしる、民衆レベルにおける言語や感情の接触の実態を探る作業は極めて少ない印象も一方で抱かされる。一口に「言語接触」といっても、そこにはさまざまな人心の交錯（相剋）があり、どう意味づけるのか、正否を問うこと自体、日中相互に複雑な心情をとまなう。戦闘の華々しい戦果の隅に、ひっそりと、時には日常生活を彷彿させる日本語の現場が語られる。それはあたかも戦火ののちの安寧を象徴しているようである。だが、現実はどうだったのか。“最初に歴史ありき”の歴史観、認識迎合主義では（記述）と接触した末端の（現実）世界には応分の懸隔があり、記述の真実を探るべく要請されるのは、多面的な視点とより柔軟な想像力でしかないだろう¹¹。

現在でも夥しいほどに「生産」される抗日映画・ドラマなどの映像作品にも日本軍兵士と無辜の民衆との言語接触が登場し、日本兵士はいずれも冷酷非道の犯罪人として描かれ、民衆に記憶される。その結果、日本人全体の素行までも野卑で粗暴な対象として認識され、日本語を知らない民衆も「スラスラ」（「死了」の日本式中国語発音）「メシメシ」といった日本語が悪夢か呪いのように定位していく¹²。「メシメシ」は単に「飯」という食糧を意味するのではなく民家に押し入って徴発する際の掛け声で侵略者のイメージである。

そうした一方で、日本軍は戦争遂行の過程で、おそらく中国人兵士も立ち寄らない奥地にも侵攻し、先々の村落で民衆と接触した。そのなかには医療、診療を要請された兵士もいたことだろう。また、殺戮を忌み嫌い、民衆と接することで多難な「戦争を生き」ようとした兵士もいたことを想起することは許されるだろうか。実際、そこで見聞した光景には、中国人が描き得なかった世界、日常空間もあっただろう。これは、戦場画家が各地で詳細なデッサン、絵画を残し、それが侵略を素材とした絵画（絵葉書なども含む）である一方、当時の民衆の風俗や暮らしの実態を如実に描き映していることも事実とも重なる。そうした行為のすべてを侵略行為に括ってしまうことにはいくらかの逡巡と異論も残る。

戦後、また解放後には、日本軍に接触し、協力した民間人もまた「漢奸」として処罰され、文化大革命期にも日本語を習っただけで迫害の対象となったという。言語接触の故に戦後も感情の齟齬に安息の場を得ることは困難であったことを、記憶にとどめておきたい¹³。

本稿で取り上げた短詩形文学、報道文学、小説に描かれた民衆の言語接触には、歴史の〈隙間〉ともいえる感情史が宿されているのではないだろうか。田中（2017, 2018b）では新聞に報道された言語接触の記事を瞥見したが、歴史家の作業において、ややもすれば等閑視された、こうした未明の接触の点景を現代に繋ぎとめることによって、もう一つの日中戦争を生きた民衆の苦難の実相が浮かび上がってくるのではないだろうか。作家が、歌人、詩人が残した作品は結局は一個人の心情に留まらず、日本人全体の加害責任を静かに問い続けることにあらためて注意を喚起したい。

*本稿は日中平和友好条約締結 40 周年記念／7.7 盧溝橋事件 記念のつどい（かながわ県民センター2018/7/7）で用いた講演資料に加筆修正したものである。当日、ご意見を賜った関係者各位に感謝申し上げる。また関智英氏（東洋文庫奨励研究員）からも種々のご教示を得た。記して感謝申し上げる。

注

- 1 戦争体験を深い創傷として受け続けた作家高橋和巳は「戦争体験と文学」というエッセイで人間の存在論的な内省の重要性を強調した。『高橋和巳全集』第 20 巻, 1980 pp.16-21。戦争文学の遺産を体験の語り部、平和資源とする立場については田中（2017）を参照。
- 2 「戦場の民 兵の素顔」、『昭和万葉集巻六』講談社 1979 p.75, pp.77-78。日中戦争期には『支那事变短歌集』『支那事变俳句集』等多くの句歌集が編まれた。
- 3 『木原孝一詩集』（1969）を参照。pp.134-136
- 4 木原孝一の『戦争の中の建設』については石川巧他（2010）に収録されている章を参照。また自我の成長と重ね合わせた「建設」の本質については大橋毅彦（2013）も参照。
- 5 木原孝一の詩、エッセイは『木原孝一詩集』を参照。
- 6 池澤茂（生年没年不詳、諸誌未確認）も田中克己、保田与重郎ら日本浪漫派として『コギト』誌上に連作短篇を発表した。「郷村小学校」、「郷村小学校（二）」、『コギト』120号、121号 いずれも 1942 年に発表された。
- 7 山本和夫（1907-1996）は児童文学作家、詩人。中支戦線に出征、帰還後に『支那のこども』、『南京城』、『戦場の月』、『詩集亜細亜の旗』など多くの戦意高揚の作品を書いた。太平洋戦争勃発後は、陸軍報道班員としてビルマ戦線にも従軍した。
- 8 河出文庫『邪宗門』（2014）佐藤優による解説。同『功

利主義者の読書術』(新潮社 2009) など。

- 9 日中戦争期の日本人反戦同盟員の具体的な活動については、香川孝志、前田光繁(1984)、藤原彰・姫田光義編(1999)などの報告、研究がある。一方、相互の言語接触(日本人捕虜に対する中国語教習、中国人兵士に対する日本語教習)の実態については、趙新利(2011)、酒井順一郎(2017)などによって近年明らかにされつつある。
- 10 笠原十九司(2017)が戦闘・戦場中心の歴史検証の記述であるのに対し、五味淵典嗣(2018)は表現者に視点をおいた考察を重視している。高崎隆治(1995)、荒井とみよ(2007)などの研究もそうした立場に立つものだが、取り上げられた従軍記のみの作品では言語接触の実態を究明するには決して十分とはいえない。
- 11 子安宣邦(2012)「日中戦争と文学という証言」では〈ただの兵隊が体現するもの〉として〈非常時〉の思想と当たり前の人間の葛藤が語られている。ただ、従軍作家は軍の「検閲」があることから、言語接触は記事化される場合、幾分脚色されるという擬製は避けられなかった。
- 12 なお、中国における抗日映画・ドラマについては劉(2013)、岩田(2018)などを参照。多くのプロパガンダ作品、娯楽作品にも奇想天外な筋書きとともに日本兵士の語りや一種の強烈なキャラクター言語としてステレオタイプ化されている。これも戦争被害によるトラウマのもたらした一種のパラノイア(paranoia)の悲喜劇ともいえよう。

参考文献

- 荒井とみよ(2007)『中国戦線はどう描かれたか 従軍記を読む』岩波書店
- 石川巧・川口隆行編(2010)『戦争を〈読む〉』ひつじ書房
- 伊藤桂一(1963)『悲しき戦記』新潮ポケット・ライブラリ、新潮社
- 岩田宇伯(2018)『中国抗日ドラマ読本 意図せざる反日・愛国コメディ』パブリブ
- 王秀鑫・郭徳宏、石島紀之監訳、抗日戦争史翻訳刊行会訳『中華民族抗日戦争史(1931-1945)』八朔社
- 大橋毅彦(2013)「少年詩人が見た戦争：木原孝一『戦争の中の建設』からの出発(上)」『日本文芸研究』64(2) 日本文学会
- 大橋毅彦(2013b)「少年詩人が見た戦争：木原孝一『戦争の中の建設』からの出発(下)」『日本文芸研究』65(1) 日本文学会
- 五味淵典嗣(2018)『プロパガンダの文学 日中戦争下の表現者たち』共和国
- 香川孝志、前田光繁(1984)『八路軍の日本兵たち』サイマル出版会
- 笠原十九司(2017)『日中戦争全史』(上・下) 高文研
- 木原孝一(1969)『木原孝一詩集』(現代詩文庫47) 思潮社
- 子安宣邦(2012)『日本人は中国をどう語ってきたか』青土社
- 酒井順一郎(2017)「八路軍敵軍工作訓練隊に於ける日本語教育」『九州産業大学国際文化学部紀要』第68号
- 佐藤優(2009)『功利主義者の読書術』新潮社
- 週刊朝日編(1982)『父の戦記』朝日選書
- 新東亜研究会(1939)『興亜ノート 新東亜の時事問題早わかり』国民図書協会
- 菅野匡夫(2011)『短歌で読む昭和感情史 日本人は戦争をどう生きたのか』平凡社新書
- 高崎隆治(1995)『戦場の女流作家たち』論創社
- 『高橋和巳全集』第8巻 河出書房新社、1977
- 『高橋和巳全集』第20巻 河出書房新社、1980
- 田中寛(2015)『戦時期における日本語・日本語教育論の諸相』ひつじ書房
- 田中寛(2017)「資料：戦時下における国語問題・海外日本語進出論—朝日新聞記事1937-1945年を中心に—」、『大東文化大学紀要』55
- 田中寛(2018a)「文学で刻む日中戦争の記憶」、『大東文化大学紀要』56
- 田中寛(2018b)「中国占領地における日本語普及の一考察—朝日新聞外地版(北支・中支)にみる日本語工作の実態—」、『新世紀人文学論究』第2号
- 趙新利(2011)『日中戦争期における中国共産党の対日プロパガンダ戦術・戦略』早稲田大学大学院政治学研究所博士論文
- 藤原彰・姫田光義編(1999)『日中戦争下中国における日本人反戦運動』青木書店
- 宮坂静生(2016)「季語探訪56 満蒙開拓ほか中国大陸詠管見」、『俳句』11月号 角川書店
- 劉文平(2013)『中国抗日映画・ドラマの世界』祥伝社新書
- 和賀井倫雄2017「語りつぐ戦争」にみる日本人の戦争の記憶—「被害」のなかの「加害」意識—, 新世紀人文学論究編集委員会編『新世紀人文学論究』No.1 pp.107-132